

# JIIA Activity Report

日本インダストリアルイメージング協会 活動報告

JIIA (Japan Industrial Imaging Association) が2006年3月に発足して以来、本年度で設立6年目を迎えました。周知のごとく、JIIAは産業用の画像処理技術の規格標準化を世界的に推進している協会です。ここではJIIAの役職者の皆様にご登場いただき、設立の経緯や各分科会の活動について、インタビュー形式で紹介していきます。今回は、理事で事務局長の木浦幸雄氏のご登場です。

## 第7回

JIIA 理事・事務局長 木浦 幸雄氏 (株)シムコ

インタビューア：JIIA会員 岩田 節子 (株)マイクロ・テクニカ

## ■JIIA設立の頃の事務局

**岩田** 本日は事務局長の木浦さんにインタビューをさせていただきます。宜しくお願いします。

**木浦** こちらこそ宜しくお願いします。

**岩田** 事務局といいますと、いわゆる事務的なことをやっていると思われのではないのでしょうか。ですが、実はJIIAの運営を担っているのは事務局ではないかと私は思っています。まずは事務局長として、設立当初の頃からのお仕事についてお話をいただけますか。

**木浦** そうですね。せっかく業界団体を立ち上げる訳ですから、まずひとつは業界全体を盛り上げるために、たくさんのメンバーに入っていただくということが大前提です。そのために、「参加してもらいメリットは何か？」を考えました。ちょうど7～8年前前という国際化の波が押し寄せてきていた時代だったので、「日本の業界団体を海外でいかに対抗できるような地位に押し込むか」ということを当初は一生懸命にやりました。

**岩田** 確かに当時は産業用画像処理業界ではこのような組織がありませんでした。組織を作るために、まずメンバー集めから始めて、理事などのお手伝いをさせていただきをお願いをするなど、かなりご苦労をされたのでは？

**木浦** 最初の20社くらいまでは、集まっていたのが大変でしたね。

**岩田** そうですね。設立の前に幹事会のようなもの

のがあって、そのミーティングに出られた方が全てJIIAに入っていたわけではありませんでした。最初の20社が集まった段階で、「これだけ集まったのだから皆さんもっと賛同して入ってください」という次の段階に移ることができました。

**木浦** 20社が40社、50社になって、そこからまた少しずつ増えていったという感じでしたね。

**岩田** 先ほど木浦さんがおっしゃったように、組織は作っても、「どこに、誰に、どのようなメリットがあるのか？」を明確にするのは難しいですね。

**木浦** 基本的には会員の皆様にメリットを感じていただけるような発信をしていかないといけない。あるいは明らかにJIIAに入ったことで会社のステータスが上がったということにならないといけない。それをどうやって打ち出していくか。また、冒頭に申し上げたように国際化の中で、メンバーも大企業ばかりではなく、簡単に駐在事務所を置ける状況ではなかったため、「少なくとも海外で行われている同業の展示会にはご一緒しましょう」とか、「こういった情報がありますよ」というものを発信することが、最初の役割だったと思います。



木浦 幸雄氏

## ■JIIAの海外進出

**岩田** 「海外に製品を販売する販路を広げたい、でも1社ではできない」「上海やドイツの展示会に、アテンドできる人は出せないけれど製品だけは置きたい」という要望があって、そういったところのお手伝いもしました。

あとはインターフェースの規格が当然日本だけのものではないので、海外の規格を取り込んでいかなければいけないこともあって、そこは大変でした。

**木浦** JIIAの設立以前、産業用カメラは日本製が8割から9割を占めている時期がありましたが、10年くらい前からそれが崩れ始めてきました。技術的にはCMOSセンサを応用したカメラが世の中のでてくるようになりました。そうするとCCDとは違った展開になって、インターフェースも違ったものができて、海外勢はそこに特化してどんどん進出してきてたわけです。そのため、日系のマーケットシェアが残念ながら急速に落ち込んでいきました。

そのような状況の中で、新しい技術がヨーロッパやアメリカから出てくることに対して、ただ単に手をこまねいていたり、日本のマーケットには合わないと木で鼻をくくっていた時期もありました。ただ、それではいくらなんでもガラパゴスになってしまうという話になって、海外の出方を正式に理解できるようにミーティングを持ったり、技術のメリット、デメリット、あるいはアドバンテージ、デスアドバンテージを確認しながら、自分たちの取れるポジションを考える議論を繰り返しました。そこで、AIA (Automated Imaging Association)、EMVA (European Machine Vision Association) の2協会に対し、JIIAも正規の団体であり、3つの協会で情報の共有化ができないかと提案し続けました。ほぼ2年半議論を費やしましたが、幸いなことに最終的には3つ一緒になって、情報を共有化しようということになり、G3のアグリメントが締結できました。それにより、一段と情報のやりとりがスムーズになってきたと思っています。ただし、新しい日本発の技術が残念ながらもなかなか上手いかず、欧米系の方が多いのですね。我々にキックオフミーティングの招待状が来た時点で、ある程度技術の骨格が固まった状態になっています。そこで、キックオフになる前、新しい規

格が立ち上がり始めたときに、我々の意見も伝えられるような環境づくりとして、AIAとEMVAと協議の上でフューチャースタンドフォーラムというものを立ち上げました。それぞれの協会から代表者が出て、将来性のある技術のシーズがマシンビジョン業界に使えるのか議論します。当然、世界的な流れの中では、各社の特許を調査しないとイケませんから時間はかかりますが、3協会が同等の立場で議論していこうということになりました。

**岩田** 私が理事をさせていただいたときにも、いくつかの海外の展示会やミーティングに参加させていただきました。その時、すでにAIAやEMVAが立ち上がっていました。AIAはすでに20年以上の歴史があり確立された協会です。EMVAはJIIAより2~3年前の設立ですが、ドイツ政府のバックアップがあり、政府が認めている正式な画像処理の組織ということになります。ところがJIIAは政府のバックアップがあるわけでもなく歴史が長いわけでもありません。画像処理機器やインテグレータの主要メンバーが集まっていますが、それでも結局は自力でなんとかしないといけないという組織であるわけで、見えないところでの事務局長である木浦さんの功績は非常に大きいと思います。先日インタビューをさせていただいた代表の岡さんも木浦さんもAIAやEMVAの主要メンバーのなかにお知り合いがいて、その方達と水面下で交渉をされて、ようやくG3のアグリメントまで漕ぎ着けたのだと思います。



本年4月、横浜で開催されたフューチャースタンドフォーラムのキックオフミーティング

**木浦** 海外との交渉に関しては、今言われたようにAIAは20年以上の歴史をもっていて、当然日系企業も多く参加されているわけです。だからアメリカからは「日本があえてそういう団体を立ち上げなくてもいいではないか」と言われました。ヨーロッパからは「日本に作っても日本の業界団体に加盟する気はないよ」とも言われました。ただ作ってみて、彼らにも日本には独特のマーケットがあることが理解できたようです。

**岩田** 私もそれを感じました。以前のシュツットガルトでのVisionShowの際、マーケティングスタディでアメリカやヨーロッパ、日本の各マーケットについて発表がありましたが、彼らが思っていたより以上のマーケットがあるということがわかって、非常に驚いていましたね。あれはやはりJIIAを認めてもらう大きなきっかけになったと思います。

**木浦** 以前は半導体を中心とした周辺装置は日本が世界を席巻していましたので、それに搭載される画像処理機ということで、CCDの仕様を度外視した超高速のカメラを競争して作ったり、欧米系の人に言わせると、「カメラヘッドをなんでこんなに小さくするの」というくらい小さくすることにしのぎを削ったりしました。それからケーブルの信頼性を高めたり、アジア人独特の神経を研ぎ澄ませたような製品を作り込んでいったのですが、残念ながらここにきてインダストリアルフィールドそのものが中国や韓国にでていたり、台湾が伸びてきたりで、なかなか昔のような栄華はありません。ですが、そういう市場が日本にはあったと知らしめるということでは大きな成果があったと思います。それによって欧米系の会社さんも随分日本に進出するようになってきました。

**岩田** そうですね。日本での展示会も以前より海外からの出展が増えました。

**木浦** 幸いJIIAにも海外から20社近く加盟していただいています。そのへんでも大きな意義があったと思います。

**岩田** なかなか海外のメーカーとふれあう機会がないところで、JIIAの日系企業のメンバーにとっては、海外と情報交換できるメリットはありますね。

シュツットガルトや上海での展示会での発表などのお膳立ては、ほとんど事務局がやっているんですか？

**木浦** もともとは事務局がやっていましたが、今では独自にやっていたいただいていることが多いです。ただ国際的なやりとりについては、今でも水面下で事前調整をしながらやっています。ただしそのへんは会員の皆さんに開示できない部分もあり、できあがった段階でご報告する形になっています。

**岩田** 上海やボストンなど拠点を変えて海外と交渉しながら様々な問題を乗り越えて、やっとここまでできたということですね。

**木浦** そうですね。まあ、今では間違いなくJIIAはヨーロッパの方からも北米大陸の方からもひとつの局としても認めてもらっています。そこで、今後我々がやらなくてはいけないことは、マーケットとしていちばん大きくなっている中国や、韓国、ブラジル、インド、ヨーロッパ勢が攻め込んでいっているロシア、そのへんですね。全世界のマーケットからみてG3をG4、G5に広げていくのか？広げていったときに情報の共有化と、その情報を同じ価値観で保持し育てていけるのか？というところですね。その辺の役割をJIIA、AIA、EMVAは担っていかなければなりません。それからJIIAとして最低でもやらなくてはいけないのは、既存のマシンビジョンマーケットで同じプレーヤーが競うのではなくて、マシンビジョンで培った高度な技術をもって、新しい業界にどんどん出て行くような勇気を皆が持てるような情報を発信していくことです。



岩田 節子氏

## ■業界の垣根を越えて

**岩田** どちらかというと、日本は入ってこられることを阻止しますよね。でもそればかりやっていると自分たちも出ていく機会が無くなったり勇気が無くなったりします。その壁みたいなものを低くして、「入ってくるのもいいよ、でも私たちも行くよ」というようになれば、もっと日本の画像関連の企業も活性化していくのではないのでしょうか。

日本インダストリアルイメージング協会 (JIIA) 年表

2006年 3月	日本インダストリアルイメージング協会 (JIIA) 設立。
2006年11月	ドイツ・シュツツガルトでのVision2007に公式参加。JIIAの設立趣旨を公式セミナーで岡代表理事が講演。
2006年12月	国際画像機器展 (横浜) にAIA、EMVAのボードメンバーを招待。初めて3協会間の運営等に関する意見交換の会議を行う。(以降、会議の名称はG3サミットと称す)
2007年 2月	AIA主催ビジネスカンファレンス (米国・フロリダ) に公式参加。現在のG3会議の準備段階の協議を行う。(第2回G3サミット)
2007年11月	ドイツ・シュツツガルトでのVision2007に公式参加、ブースにてJIIA発案規格の展示を行う。(以降、本展示会にてG3の各協会が、それぞれの規格を展示する「International Standard Booth」が公式に設置された。)(第3回G3サミット)
2008年 2月	AIA主催ビジネスカンファレンス (米国・フロリダ) に公式参加時の第4回G3サミットにて、3協会間「国際標準の推進方法、コンプライアンスの共有化」を主眼に「覚書」を作成する事が決定。
2010年10月	北米、欧州、日本の法務的な助言を基に、約2年半を費やした3地域間の「覚書」の文面を相互に承認。ドイツ・シュツツガルトでのVision2010に公式参加時に、「調印式」を開催。3地域間での国際規格の推進が正式に発効される。(この後、年3回開催の会議は、「G3会議」と名称を変更)
2011年 9月	ドイツにてのAIA主催「国際規格技術会議」にて、G3会議傘下に「将来の新規規格の検討をする組織を設立する」事を念頭に「Future Standard Forum」設立の提起をJIIA主導にて行う。
2012年 4月	横浜にて、「Future Standard Forum」準備会議をAIA、EMVAの各団体から代表者参加の元、開催。
2012年 5月	米国・ボストンにてのG3会議にて、「Future Standard Forum」の内規を承認、同年8月より組織運営を開始する事を決議。

**木浦** マシンビジョンという小さなカテゴリだけで考えるのではなくて、例えば自動車関連でもカメラが相当使われているわけです。昔はカメラだけでしたが、カメラ周辺で画像処理もどんどんやっています。元々我々の得意分野としている領域なのに、そこにまだ上手く入り込めていない。逆に言えばあちらの技術のほうが、我々より進んできている可能性があるかもしれない。その辺りもお互いが連絡をとりながら情報交換をしながらやっていけば、まだまだ我々の業界の技術やビジネスが広がっていく可能性が大いにあるのではないのでしょうか。もちろんメディカル分野やミリタリー関連など、そういう特殊な市場にも我々の提案力というのはあるはずで。そういうところにもフィールドを広げていく。そのためのヒントや情報を提供していくのがJIIAの事務局として今後やるべき仕事なのかなと考えています。

**岩田** JIIAのなかにもいくつか分科会があって、自分たちが所属をしている分科会の技術情報については分かります。多分、技術者が参加をしているケースが多いですから。おそらく、「自分たちの会社の製品としてどうしようか？」そこまでは皆さん考えていらっしゃると思います。でも当然、ものを作ったら売らないといけない。といったところで営業の方も含めて海外への展開を考えるきっかけにはしてほしい。国内だけでものを売っていてもこれ以上伸

びないというのがあります。

**木浦** ありますね。これは僕らの業界だけでなく、国全体のことだろうけれども。でも少なくとも我々が立脚しているこの業界が断ち切れになることないようにしていくための旗振り役を率先してやっていかないといけないとは思っております。

**岩田** ところで木浦さんも、事務局長役は長いですね？ (笑)

**木浦** そろそろ皆さんにお渡ししたいと思っております。(笑)

**岩田** 理事は2～3年で代わりますが、事務局長は代わりませんね。木浦さんの場合は理事でありながら事務局長もやり、通常の仕事もおやりになっているわけで、本当に大変ですね。

**木浦** 大変ですがいい勉強をさせていただいていると思っております。近いうちにどなたかにバトンタッチをしたいと考えています。(笑)

**岩田** 本日はお忙しいところ有難うございました。

問い合わせ先

日本インダストリアルイメージング協会 (JIIA)

〒153-0061 東京都目黒区中目黒2-10-15  
山手Kビル7F ㈱シムコ内

TEL/FAX : 03-3716-3933

E-mail : info@jiiia.org

URL : http://www.jiiia.org/